

宮古島与那覇方言のアクセント交替

— 3 モーラのフットを持つ方言 —

松 森 晶 子

1. 宮古島与那覇方言のアクセント

平山・大島・中本(1967)の宮古島諸方言の記述では、「池間・佐良浜・国仲・与那覇・西原・大浦・狩俣」や「多良間・城辺・友利・砂川・上地」などに、アクセント型の区別のある方言が分布するとされている。しかし、多くの先行研究では、宮古諸島のアクセントは、他のアクセント型の区別のある琉球諸方言と比較すると、「型の区別はそう明瞭ではない」(平山(編著)1983:43)と記述されてきた。

今回この論文で取り上げる与那覇方言もその例外ではなく、平山・大島・中本(1967)は、この方言の2型アクセント体系を、「1型アクセントのように誤って観察するおそれがあるが、事実は低平型と高平型との対立がある」(平山・大島・中本1967:27)と記述している。また崎村(2006:66)も、与那覇方言には「ごく区別のしにくい」2つの種類の音調があり、「したがって、2型音調とは云うものの、この方言は1型音調ないし無型音調の方言にごく近づいたものと見るのが当を得ているようである」、と結論づけている。

しかし私の過去2回(1995年と1999年)にわたる与那覇方言の調査では、非常にはっきりと区別される2つの型の区別が観察された。¹⁾これは、五十嵐(2012)の調査結果と一致している。

この方言の2つの型の区別が特に明瞭になるのは、名詞が3モーラ以上になった場合である。また、後述するように、その3モーラ以上の名詞の後ろに3モーラ以上の助詞(あるいは助詞連続)が続いた場合に、この方言には、非常に明瞭な2型アクセント体系が出現する。以下はこのことについての記述報告と、その記述に基づいた(現時点での暫定的な)解釈である。²⁾

ところで、平山ほか(1967)の与那覇方言のアクセント記述は、名詞単独形とそれにnudu(主格助詞nu+焦点標識du)を付けた文における観察にとどまっている。五十嵐(2012)も、本稿と同じくこの方言に明瞭な2型の区別があることを報告しているが、この報告も名詞にnuduと、mee(並列助詞)を後接し、そのあとに述語を付けたキャリア文のアクセントの報告に基づいている。つまり、平山ほか(1967)も、五十嵐(2012)も、名詞に後続する部分(これをここでは仮に「助詞連続」と呼ぶ)が、最大2モーラの場合のみにとどまっている。(一方、崎村(2006)がどのような助詞を後続させて、2つの音調の区別の有無を観察したのかは、崎村(2006)には明示されていない。)しかし、この方言では、名詞に後続する助詞連続が3モーラ以上になっ

た場合に、特に明瞭な2つの型の対立が出現する。このことを、本稿では報告したい。

以下、与那覇方言の2つの型を、五十嵐(2012)にしたがって、それぞれ[AB型]、[C型]と呼ぶこととしたい。本稿の仮説を検証するために使用した調査語は、以下の(1)に示すとおりである。なお、各語のモーラ数がはっきり分かるよう、この音韻表記では、子音ひとつで1モーラ分とカウントされる分節(moraic segment)を大文字で示すことにした。(なお本稿では、記述上の便宜のため、ペラール・林(2012)によってfricative vowelと記述されている摩擦的噪音を伴う母音/ɣ/をIで代用することにする。)

(1) 与那覇方言の調査語

AB型 : 家/jaR/、尾/zuR/、川(井戸)/kaR/、木/kiR/、酢/suR/、葉/paR/、湯/juR// 雨/ami/、烏賊/ika/、板/ita/、今/nama/、牛/usI/、斧/jukI/、風/kazi/、紙/kabI/、昨日/kInu/、今日/kjuR/、去年/kuzu/、口/fucI/、胡麻/guma/、雲/fumu/、魚/zzu/、酒/saki/、鮫/saba/、袖/sudi/、土/Mta/、鳥/tuI/、涙/nada/、にんにく/piI/、鼻/pana/、花/pana/、畑/pari/、腹/bata/、髭/pIgi/、人/pItu/、筆/fudi/、豆/mami/、水/mizI/、道/McI/、麦/mugI/、虫/musI/、山/jama/、綿/bata/、藁/bara// 油/aVva/、従兄弟/icIfu/、腕/kaina/、馬/nuRma/、踊り/buduI/、帯/sIpugI/、蛙/manata/、鏡/kagaM/、瓦/kaRra/、車/kuruma/、麴/koRzI/、今年/kutusI/、暦/kujuM/、砂糖黍/buRgI/、砂/Nnagu/、大工/sajafu/、太鼓/cIzIm/、宝/takara/、俵/taRra/、血/akacI/、力/cIkara/、杖/gusjaM/、飛び魚/tubjuR/、葱/suNna/、袴/pakama/、鳩/Mbatu/、膝/cIbusI/、額/futai/、昼/pIsuma/、袋/fukuru/、枕/maQfa/、ヤモリ/jazumi// 弁当/beNtoR/、湯/acujuR/、郵便/juRbiN/

C型 : 明日/aca/、息/ikI/、臼/usI/、桶/tagu/、傘/sana/、髻/kami/、声/kui/、砂糖/sata/、猿/saru/、虱/ssaM/、草履/saba/、ソテツ/ssjuC/、鍋/nabi/、蚤/nuM/、柱/para/、針/piI/、ひしゃく/sasji/、舟/puni//funi/、篋(土を掘る道具)/pira/、星/pusI/、骨/puni// 歌/aRgu/、あくび/afucu/、鰻/unagI/、運搬網/oRda/、甥姪/mjuRI/、扇(団扇の意味)/oRgI/、大蛙/funata/、おでき/nibuta/、桶/uRki/、蚊/gazaM/、顔/mipana/、籠/baRki/、刀(包丁の意味)/katana/、釜/ukama/、鎌/zzara/、髪/karazI/、烏/garasa/、キャベツ/tamana/、葉/fusuI/、下駄/aQca/、策/soRki/、塩/maRsu/、硯/suzuI/、大根/upuni/、薪/tamura/、卵/tunaka/、盥/taraI/、トンボ/giRcu/、庭/minaka/、鋏/pasaM/、箸/umisu/、火/umacI/、光/pIkaI/、ひょうたん/cIguI/、へちま/nabjaRra/、箒/poRki/、孫/Mmaga/、ヤギ/piNza/、夜中/junaka/、来年/jaRni/、らっきょう/dakjoR/、椀/makaI// 朝/sItumuti/、頭/kanamaI/、ごぼう/guMpoR/、しゃもじ/misukina/、パイヤ/maNzjuR/、夕方/jusarabi/

調査では、(1)に示された名詞の後ろにnudu、meR、meRdu、karaduなど様々な助詞、あるいは助詞連続を付け、たとえばkazi nudu cuRkaR(風が強い)、kusa meR toRretaN(草も倒れ

た)、usI meRdu uI (牛もいる)、Mta karadu idasItaR (土から出した)のように文を作成してもらい、その文中での名詞とその後続の助詞連続のアクセントを観察した。(各型の正確な比較には、五十嵐(2012)が行ったように、各文の述語部分もそろえたキャリア文に入れて発音してもらう必要があるのだが、本調査ではそのような観察は行ってはいない。)

またその際、「舟が見える、土に埋める、山から来る」など、それぞれの名詞+助詞(あるいは助詞連続)を使って自然な文が作れるものだけを選んで、各話者に発話してもらった。したがって、(1)にあるすべての名詞に、同じ助詞(あるいは助詞連続)を付けて文を発音してもらったものではない。

2. 2モーラ名詞に助詞連続が後接した場合

まず2モーラの名詞に焦点を当てて考察してみよう。たとえば「主格の助詞nu+焦点標識du」という助詞連続nudu(〜が)を2モーラ名詞に後続させた場合、2種類の型の区別が、次のように出現した。AB型のほうは、五十嵐(2012)の観察した結果と一致するが、C型のほうは五十嵐(2012)の観察結果とは異なり、2拍めからピッチが上昇する音調型を示した(五十嵐(2012)はこれを、助詞nuduを含めすべてのモーラが高く実現する、と記述している)。

(2) 2モーラ名詞にnuduが後接した場合の音調型

[AB型]	kazi <u>nudu</u> … (風が…)	saki <u>nudu</u> … (酒が…)
	pana <u>nudu</u> … (花が…)	jukI <u>nudu</u> … (斧が…)
[C型]	puni <u>nudu</u> … (舟が…)	usI <u>nudu</u> … (臼が…)
	nabi <u>nudu</u> … (鍋が…)	sana <u>nudu</u> … (傘が…)

次にNdu(入格助詞N+du、〜に)を付け「水に漬ける、鍋に入れる、鼻に付ける」のような文を作ってもらった場合にも、(2)のnuduの場合と同じような2種類の型の区別が出現した。しかしその場合も、上述のnuduの場合と同じように、AB型は低く始まってNduの最後のモーラだけが高くなり、C型は低く始まって2モーラ目から上昇した。その型の区別は、次の(3)のようである。

(3) 2モーラ名詞にNduが後接した場合の音調型

[AB型]	pana <u>Ndu</u> … (鼻に…)	saki <u>Ndu</u> … (酒に…)
[C型]	nabi <u>Ndu</u> … (鍋に…)	sata <u>Ndu</u> … (砂糖に…)

平山ほか(1967)や崎村(2006:66)の記述に従うと、本稿のAB型には「低平型」、C型には「高平型」が出現する、ということになるのだが、私の調査した3人の話者の発音では、少なくともnudu(主格+焦点標識)、Ndu(入格+焦点標識)という助詞連続が2モーラ名詞に後続した場合には、AB型にもC型にも、そのような型は観察されなかった。

私の調査では、この2種の型は、まずAB型のほうは「低く始まり助詞連続の最後のモーラだ

けが1モーラ分高い型」、そしてC型のほうは「低く始まり2モーラ目から上昇する型」、と記述することができる。これらがなぜ、このような音調型として出現するかについては、この論文の第5節で説明を試みる。

次に属格のnu(～)を後続させて「山の中、風の音、花の色」のような句を作ってもらくと、2種類の型の区別は次のように出現した。

(4) 2モーラ名詞に属格のnuが後接した場合の音調型

[AB型] kazi nu naI (風の音) jukI nu naI (斧の音)³⁾
 [C型] nabi nu naka (鍋の中) funi nu iru (舟の色)

その場合も、上述のnuduの場合と同じように、AB型は低く始まりnuまでの3モーラ分が低くなるが、C型は語頭から高く始まりnuの直後でピッチが下降した。つまり、C型だけを見ると次のようなアクセント交替が観察されることになる。

(5) 2モーラ名詞C型のアクセント交替

nudu、Nduが後続する場合 ○●▲▲…
 nu(属格)が後続する場合 ●●▲…

なぜこのような音調型の交替が見られるのかについても、第5節で分析を試みよう。

これらに対して、並列助詞meRが後続した場合は、この2種類の型の違いは不明瞭になる。つまりこの環境では、AB型とC型との違いは、次のような合流傾向を示す。これは、「この条件下では、AB型とC型との違いが中和するようである」とした五十嵐(2012:62)の観察結果と一致する。

(6) 2モーラ名詞にmeRが後接した場合の音調型

[AB型] kazi meR … (風も…)
 [C型] usI meR … (臼も…)

[AB型] pana meR … (花も…)
 [C型] puni meR … (骨も…)

一方、2モーラ名詞に3モーラの助詞連続meRdu(並列助詞meR+焦点標識du)がつくと、原則的に次のようになり、2種類の型の区別が出現した。⁴⁾

(7) 2モーラ名詞にmeRduが後接した場合の音調型

[AB型] saki meRdu … (酒も…)
 [C型] nabi meRdu … (鍋も…)

[AB型] usI meRdu … (牛も…)⁵⁾
 [C型] puni meRdu … (骨も…)

しかしこの場合も、AB型がsaki meRdu…(酒も)、pana meRdu…(鼻も…)のように出現して、C型と同じパターンのように聞こえることもあった。したがってこの環境でも、AB型とC型の音調型は明瞭に区別できる、と言うわけにはいかない。どうしてこのような合流傾向を示

すのかについては、第5節で考察を試みることにする。

同じような3モーラの助詞連続karadu（奪格助詞kara+焦点標識du）の場合にも、次のようにAB型とC型との違いが合流する傾向が著しい。

(8) 2モーラ名詞にkaraduが後接した場合の音調型

- | | | |
|-------|-----------------------------|-----------------------------|
| [AB型] | mizI <u>karadu</u> … (水から…) | fucI <u>karadu</u> … (口から…) |
| [C型] | nabi karadu … (鍋から…) | usI karadu … (臼から…) |

同様に、3モーラの助詞連続gamidu（到格助詞gami+焦点標識du）の場合にも、AB型とC型は中和してしまい、助詞連続部分が全体的に高く発音された。⁶⁾

(9) 2モーラ名詞にgamiduが後接した場合の音調型

- | | | |
|-------|-----------------------------|------------------------------|
| [AB型] | jama <u>gamidu</u> … (山まで…) | kuzu <u>gamidu</u> … (去年まで…) |
| [C系列] | funi <u>gamidu</u> … (舟まで…) | pari <u>gamidu</u> … (畑まで…) |

また、助詞連続sjiRdu（具格助詞sjiR+焦点標識du）⁷⁾の場合にも、同様な合流傾向が観察された。

(10) 2モーラ名詞にsjiRduが後接した場合の音調型

- | | | |
|-------|----------------------------|----------------------------|
| [AB型] | fudi <u>sjiRdu</u> … (筆で…) | saki <u>sjiRdu</u> … (酒で…) |
| [C型] | kami <u>sjiRdu</u> … (甕で…) | funi <u>sjiRdu</u> … (舟で…) |

このように2モーラ名詞の場合は、連続する助詞連続がある特定のものになった場合に限り、2つの型の区別が合流してしまう傾向がみられる。平山ほか（1967：27）や崎村（2006：65-66）などの先行研究が、この与那覇方言について、2つの型の区別が「明瞭ではない」と記述してきたのは、おそらく以上のような2モーラ名詞の型の合流傾向を観察したものではないか、と思われる。

しかし、いったいなぜ、meR、meRdu、karadu、gamidu、sjiRduなど、ある特定の助詞あるいは助詞連続が後接した場合に、このような合流傾向が観察されるのだろうか。この点についても、本稿では第5節で考えてみたい。

3. 3モーラ名詞に助詞連続が後続した場合

前節では、2モーラ名詞に特定の助詞連続が続いた場合、2つの型の音調型が合流の傾向を示すことを見てきた。しかし、名詞が2モーラではなく3モーラになると、どのような助詞（助詞連続）を付けても、AB型とC型との違いが非常に明瞭に出現することが分かった。また特に、後続する助詞連続が3モーラの場合に、この2つの型の区別が顕著に出現することも判明した。

まず、3モーラ名詞に主格の助詞連続nuduや、入格の助詞連続Ndu（N+焦点標識du）、そ

して属格の助詞 nu が後接した場合には、次のような型の対立が見られる。このうち、主格の助詞連続 nudu が付いた場合の音調型については、五十嵐（2012）の報告結果と一致している。

(11) 3モーラ名詞に nudu が後接した場合の音調型

- [AB型] manata nu du … (蛙が…)
- [C 型] garasa nu du … (鳥が…)
- aVva nu du … (油が…)
- poRkI nu du … (箒が…)

(12) 3モーラ名詞に Ndu (入格 + du) が後接した場合の音調型

- [AB型] Nnagu Ndu … (砂に…)
- [C 型] maRsu Ndu … (塩に…)

これらの場合には、AB型のほうは、(2) や (3) で示した2モーラ名詞の場合と同じように、低く始まって助詞連続の最後のモーラだけが高く出現した。一方、C型のほうは、2モーラ名詞の場合とはそのピッチの上昇位置が少し異なり、3モーラ目から上昇した。

属格の nu が付いた場合には、次のような対立が見られた。

(13) 3モーラ名詞に属格の nu が後接した場合

- [AB型] kagaM nu iru (鏡の色)
- manata nu kui (蛙の声)
- [C 型] katana nu iru (刀の色)
- garasa nu kui (鳥の声)
- aVva nu iru (油の色)
- kuruma nu naI (車の音)
- poRkI nu iru (箒の色)
- pasaM nu naI (鋏の音)

AB型は出だしの3モーラが低くなり、4拍目（つまり助詞 nu の直前）からピッチが上昇する。これに対してC型のほうは、第1モーラ目の直後で上昇し、いったん上昇するとその高さは、原則的に3モーラ分、連続する（ただし、poRkiのように特殊モーラが2音節目にある場合は、poRkI nuとはならず、poRkI nuのように聞こえた）。

以上をまとめると、3モーラ名詞の2つの型は次のように出現したことになる。

(14) 3モーラ名詞のアクセント型

- ・ nudu、Nduなどの助詞連続が後接した場合

[AB型] ○○○△▲…

[C 型] ○○●▲▲…

- ・ 属格の nu が後接した場合

[AB型] ○○○▲…

[C 型] ○●●▲…

ここでも後ろに付く助詞の違いによって、アクセント型が交替を見せる。特にC型は、nuduやNduが後続した場合は○●●▲▲…となるのに対して、属格の nu が後続した場合は○

●●▲…となっていることが注目される。これらが、なぜこのような型で出現するのかについては、第5節で考察する。

なお、(6) では2モーラ名詞に並列助詞 meR が後接した場合の音調型を扱っているが、3モーラ名詞については、この条件では調査は行っていない。しかし、五十嵐 (2012:62) の報告によると、AB型は名詞の3モーラ目からピッチが上昇し、その高さが助詞 meR の終わり部分まで継続するのに対して、C型は名詞全体が高くなり、その後、助詞 meR の始めでいったん下がり、その第2モーラでまた高くなる、と記述されている。その五十嵐 (2012:62) で提示されたピッチ曲線を見る限り、この環境でも、2つの型は明瞭に区別されているようだ。

さて、今回の調査結果のなかでもっとも興味深かったのは、3モーラの名詞の後に、meRdu、karadu、sjiRdu という3モーラの助詞連続が後接した場合の音調型である。この場合、次の例に見られるように、2つの型の違いが次のような音調型によってはっきりと区別できた。

(15) 3モーラ名詞の2種の型

- [AB型] manata meRdu uI (蛙もいる。)
 [C型] funata meRdu uI (大蛙もいる。)

つまり3つのモーラがひとまとまりとなって単位を形成し、AB型はL音調>H音調の順で、C型はH音調>L音調の順で、その単位全体に、音調が被さっているようなパターンが観察された。したがって、たとえばAB型の名詞は○○○meRdu…となるのに対して、C型の場合は、○○meRdu…のようになって、両者の区別が非常に明瞭になる。

並列助詞から成る助詞連続 meRdu (並列 meR + 焦点標識 du) を後接した場合の、他の3モーラ名詞の例をさらに見てみよう。

(16) 3モーラ名詞に meRdu が後接した場合の音調型

- | | | |
|---------|-----------------------------|------------------------------|
| [AB型] | <u>buduI meRdu</u> … (踊りも…) | <u>kagaM meRdu</u> … (鏡も…) |
| | <u>taRra meRdu</u> … (俵も…) | <u>maQfa meRdu</u> … (枕も…) |
| | <u>aVva meRdu</u> … (油も…) | <u>kuruma meRdu</u> … (車も…) |
| [C型] | <u>aRgu meRdu</u> … (歌も…) | <u>katana meRdu</u> … (包丁も…) |
| | <u>pasaM meRdu</u> … (鋏も…) | <u>fusuI meRdu</u> … (薬も…) |
| | <u>oRgl meRdu</u> … (団扇も…) | <u>poRkI meRdu</u> … (箒も…) |

ここから分かるように、最初の3モーラ名詞がAB型の場合には、その名詞部分全体が低く出現し、後続する助詞連続部分全体が高くなる。これに対し、名詞がC型の場合には、その名詞部分全体が高くなって、後続する助詞連続部分の直前で下がり、助詞連続全体は低く抑えられる。この場合、2種類の音調型は、(14) にまとめた nudu、Ndu や属格の nu などの助詞 (助詞連続) が後接した場合とは、かなり異なったものであることが注目される。

この meRdu が後続した場合と同じことが、karadu (奪格 kara + 焦点標識 du) や sjiRdu (道具

格 sjiR + 焦点標識 du) が後続した場合にも言える。次の例を見てみよう。

(17) 3モーラ名詞に karadu が後接した場合の音調型

- [AB型] aVva karadu … (油から…) taRra karadu … (俵から…)
 [C型] soRki karadu … (籠から…) makaI karadu … (椀から…)

(18) 3モーラ名詞に sjiRdu が後接した場合の音調型

- [AB型] aVva sjiRdu … (油で…) kacuR sjiRdu … (鯉^{かつお}で…)
 [C型] katana sjidu … (包丁で…) ukama sjidu … (釜で…)

このように、3モーラ名詞に meRdu、karadu、sjiRdu など3モーラの助詞連続が連続すると、この方言の2種類の型の区別は、次のような音調型の違いによって、非常に明瞭に出現する。

(19) 3モーラ名詞のアクセント型—meRdu、karadu、sjiRdu などの助詞連続が後接した場合

- [AB型] ○○○▲▲▲…
 [C型] ●●●△△△…

これまでの観察結果をまとめると、3モーラ名詞は、ほとんどの助詞（助詞連続）を後ろに付けても、AB型とC型との違いが明瞭に出現することが分かった。そして3モーラ名詞は、後ろにくる助詞によってアクセント型が交替することも分かった。AB型は(20a)のように交替し、C型は(20b)のような交替を示している。

(20) a. 3モーラ名詞 [AB型] のアクセント交替

- nudu、Ndu が後接した場合 ○○○△▲…
 属格の nu が後接した場合 ○○○▲…
 meRdu、karadu、sjiRdu が後接した場合 ○○○▲▲▲…

b. 3モーラ名詞 [C型] のアクセント交替

- nudu、Ndu が後接した場合 ○○●▲▲…
 属格の nu が後接した場合 ○●●▲…
 meRdu、karadu、sjiRdu が後接した場合 ●●●△△△…

以下は、この方言がなぜこのようなアクセント交替を見せるのかについての考察である。

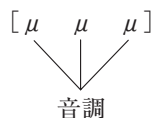
4. 3モーラを単位としたフットの存在

さてここで重要なことは、(15)～(18) にみられるような明瞭な型の区別は、3モーラ以上の名詞から文を開始する場合に特に明瞭に出現した、という点である。このことを説明するために

本稿では、Shimoji (2009) が伊良部島のアクセントを記述するにあたって提唱した、モーラを単位とした「フット」という概念を採用して記述を試みる。

与那覇方言では、次のように「3モーラ」がひとつの単位となってまとまって、ひとつのフットを形成する、と考えられる。そのフット全体にH音調、あるいはL音調が指定される、と考えるのである。

(21) 与那覇方言における音調指定



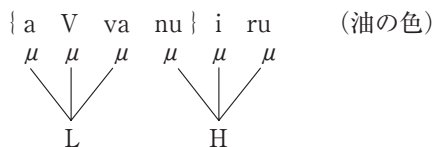
つまり伊良部島のアクセント記述において提唱されたフットが、この与那覇方言にも存在する、と考える。だが、伊良部島のフットが「2モーラ」でひとつのまとまりとなってフットを形成するのが無標 (Shimoji 2009) なのに対して、与那覇の場合は「3モーラ」でひとまとまりの単位となってフットを形成するのが原則である、という点が異なる。

前節では、与那覇方言では、AB型はL音調から始まり語頭から3モーラ分L音調が続き、4モーラ目でHへと上昇するのに対して、C型のほうは、逆にHから始まって3モーラ分H音調が続き、4モーラ目ではじめて下降する、ということを見てきた。このことを説明するために、AB型はLH型、C型はHL型のような音調メロディーを持つ、としておく。辞書内部では、それぞれの語ごとに、LH型、HL型のどちらかの音調メロディーが指定されていると考えておくのである。⁸⁾

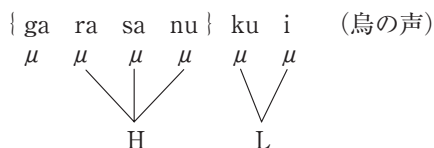
次に、フットを構築する際の範囲 [ドメイン] だが、それは原則的に名詞ではなく、名詞に助詞 (あるいは助詞連続) を後接させた「名詞+助詞連続」である、と仮にしておく。今、フット構築の範囲を、仮に { } で囲んで示すことにし、このことを (13) で示した3モーラの名詞+属格の nu で例示すると、次のようになる。

(22) フット構築の範囲

[AB型の場合]



[C型の場合]



つまり、nudu、Ndu、nuなどが後接した場合は、その助詞連続をも含んだ文節全体がフット構築の範囲となる。

5. 3モーラのフットを用いた解釈

さて、以上のことを念頭に入れ、ここで第2節で扱った2モーラ名詞の音調型について検討してみよう。次の例は、(2)と(3)ですすでに見てきた例であるが、どうしてこのような型で出現するのかを、以下、「3モーラのフット」という概念を使って説明してみよう。

(23) 型の区別が明瞭に出現する場合 (2モーラ名詞+助詞連続)

a. 主格の *nu* が後接した場合

[AB型] $\overline{\text{kazi nu}} \overline{\text{du}}$ … (風が…)

$\overline{\text{saki nu}} \overline{\text{du}}$ … (酒が…)

[C型] $\overline{\text{puni nu}} \overline{\text{du}}$ … (舟が…)

$\overline{\text{usI nu}} \overline{\text{du}}$ … (白が…)

b. 入格の *Ndu* が後接した場合

[AB型] $\overline{\text{pana Ndu}}$ … (鼻に…)

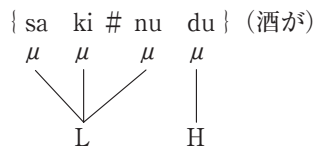
$\overline{\text{saki Ndu}}$ … (酒に…)

[C型] $\overline{\text{nabi Ndu}}$ … (鍋に…)

$\overline{\text{sata Ndu}}$ … (砂糖に…)

AB型は低く始まり、その低い音調が3モーラ分連続しているのので、語頭から3モーラのフットが形成され、そのフットを単位にしてLH音調が指定される。

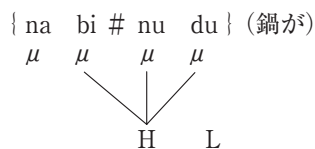
(24) AB型 (LH音調) のフット構築 (2モーラ名詞+助詞連続)



これに対してC型の場合は、ピッチがいったん上昇すると、その高い部分は3モーラ分続いているものの、開始部分のモーラは高いとは限らない。むしろ $\overline{\text{puni nu}} \overline{\text{du}}$ … (舟が…) のように低く始まっている。したがって、フット構築は、(原則的に) 文節の後ろのほうから開始する、と考えておこう。

C型は次のように、文節末から3モーラのフットが形成され、そのフットにHLという基本音調のHの部分結びつく。(その結果、最終的に音調が付与されないモーラには、デフォルトのL音調が実現する。)

(25) C型 (LH音調) のフット構築 (2モーラ名詞+助詞連続)



以上、AB型にもC型にも、3モーラがひとまとまりのフットによって音調が指定されることを見てきた。

このような音調指定は、属格の *nu* が後続した場合にも言える。以下、2モーラ名詞と3モー

ラ名詞の場合のAB型とC型の区別をまとめて示すが、これらも3モーラを単位とするフットによって説明できる。

(26) 属格のnuが後接した場合の音調型

a. 2モーラ名詞に属格のnuが後接した場合

[AB型] $\overline{\text{kazi nu naI}}$ (風の音) $\overline{\text{jukI nu naI}}$ (斧の音)

[C型] $\overline{\text{nabi nu naka}}$ (鍋の中) $\overline{\text{funi nu iru}}$ (舟の色)

b. 3モーラ名詞に属格のnuが後接した場合

[AB型] $\overline{\text{kagaM nu iru}}$ (鏡の色) $\overline{\text{kuruma nu naI}}$ (車の音)

[C型] $\overline{\text{katana nu iru}}$ (刀の色) $\overline{\text{pasaM nu naI}}$ (鋏の音)

「 $\overline{\text{kazi nu naI}}$ (風の音)、 $\overline{\text{kagaM nu iru}}$ (鏡の色)」の音調型から分かるように、AB型は2モーラ名詞も3モーラ名詞も、出だしから3モーラ分、低い音調が続く。これに対して、C型のほうは、「 $\overline{\text{nabi nu naka}}$ (鍋の中)、 $\overline{\text{katana nu iru}}$ (刀の色)」から分かるように、2モーラ名詞も3モーラ名詞も、その高い部分が文節末から3モーラ分、連続していることが分かる。

さてそれでは、(6) ~ (10) で見てきたように、どうして2モーラ名詞に meRdu 、 karadu 、 gamidu 、 sjIRdu のような、ある特定の助詞連続が続いた場合だけに、2つの型が合流し、その対立が見えなくなってしまう傾向にあるのだろうか。本稿では、これはフット構築の性質によるものとする。つまり、次のような制約がフットには存在すると仮定するのである。

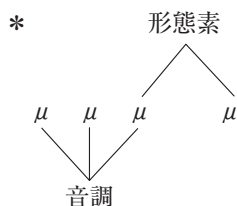
(27) フットの形成に関する制約

フットは、形態素を分断することができない。

(つまり、1つの形態素の一部のモーラのみを切り取って、フットのメンバーに加えることができない。)

つまり、次のようなフット構築の仕方は許されない、ということになる。

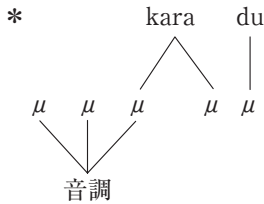
(28) 許されないフット構築



つまり、フットは (nu+du や N+du の最初の1モーラだけを切り取って、自分の内部に取り込むことはあっても)、 meR+du 、 kara+du 、 gami+du 、 sjIR+du などの最初の1モーラだけを切り取って、その一部に取り入れることはできない。より具体的に言えば、次に例示されているように、 meR 、 kara 、 gami 、 sjIR という形態素のそれぞれにおいて、第1モーラ目の me 、

ka, ga, sjiの部分だけを切り取ってフット内部に組み込むようなことは許されない、ということである。

(29) 許されないフット構築の例



このようにフット構築が形態構造に依存して行われるということは、他の宮古諸島にも広く観察されるのではないだろうか。今後、この点に焦点を当てながら、さらに記述地域を広げていきたい。

さて、(27) のような制約があるために、たとえば2モーラ名詞に karadu が後接した場合、AB型が *○○△▲▲ (mizI karadu…) のようにはなれなかったものと思われる。そのため、この型は2モーラのみしか低い音調が語頭に出現しない *○○▲▲▲ (mizI karadu…) の型で出現してしまい、結果的にC型の無標の音調型○○▲▲▲ (nabi karadu…) と合流してしまった、と考えるのである。

(30) 与那覇方言における2つの型の合流

[AB型] mizI karadu… (水から…) *mizI karadu… (水から…)
 [C型] nabi karadu… (鍋から…)

与那覇方言のAB型とC型が同じ音調型となって出現してしまう背景には、このような原因があるのではないか。

第2節では、nudu、Ndu、nu以外の多くの助詞連続を後続させた場合に、2モーラ名詞の2つの型の違いが不明瞭になる、ということ述べた。しかし、これまで述べてきたことから明らかかなように、2モーラ名詞であっても、それに後続する要素に工夫を施せば、この方言における2つの型のアクセントの違いをはっきりと識別することができる。

第2節の(4)では、属格のnuを付けると、AB型とC型の区別が明瞭に出現することを述べたが、たとえばこの属格のnuを使って「～の他はない (～nu puka njaRN)」というような文を造り、それらを発音してもらえると、2モーラ名詞であっても、2つの型の明瞭な対立をはっきりと観察することができた。

(31) 「～の他はない」という文におけるAB型とC型の区別

[AB型] jama nu puka njaRN (山の他はない)
 pana nu puka njaRN (花の他はない)
 mugI nu puka njaRN (麦の他はない)

- $\overline{\text{piI}} \text{ nu } \overline{\text{puka}} \overline{\text{njaRN}}$ (にんにくの他はない)
 [C 型] $\overline{\text{funi}} \overline{\text{nu}} \overline{\text{puka}} \overline{\text{njaRN}}$ (舟の他はない)
 $\overline{\text{nabi}} \overline{\text{nu}} \overline{\text{puka}} \overline{\text{njaRN}}$ (鍋の他はない)
 $\overline{\text{sata}} \overline{\text{nu}} \overline{\text{puka}} \overline{\text{njaRN}}$ (砂糖の他はない)
 $\overline{\text{piI}} \overline{\text{nu}} \overline{\text{puka}} \overline{\text{njaRN}}$ (針の他はない)

このようにして2モーラ語の「にんにく (piI)」と「針 (piI)」は、アクセントで対立する同音異義語であることが分かった。

ここでも、AB型はLH型で、C型はHL型である。この場合、AB型では、LH型の出だしのL音調も、続くH音調もそれぞれ3モーラをセットとするフットにしたがって出現している。一方、C型のほうは、そのHL音調の出だしのH音調のほうは3モーラ分の長さで出現するが、次のL音調の長さについては、3モーラとは限らないようである。

なぜこのような違いが生じるのかについては、今のところ不明であるが、少なくとも、2モーラ名詞の型の区別も、その条件さえ工夫すれば非常に明瞭に識別できることは明らかになった。

したがってこの方言を、「1型アクセント、あるいは無型アクセント体系になりかけている」体系と見做すことは、けっして妥当な記述ではないと言えるだろう。

6. フット構築の仕組みとその例外

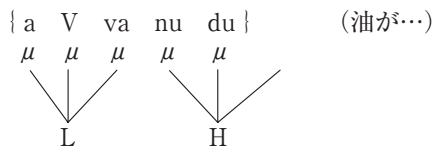
さて、第5節では、AB型でもC型にも、3モーラをひとまとまりとするフットの形成は「AB型は文節の頭から、C型は文節末から開始される」という違いがあることを見てきた。

しかし3モーラ以上の名詞の場合は、事情が違っている。

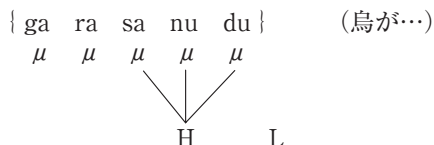
今仮に、3モーラ名詞に、助詞連続のnudu、Nduや、属格助詞のnuなどが後接した場合は、その助詞連続をも含む文節全体がフット構築の範囲となり、AB型は文節の始めから⁹⁾、C型は文節末から、フット構築が成されると考えてみよう。そうすると、次のようなフット形成が予想される。

(32) フット構築の範囲

[AB型の場合]



[C型の場合]



C型のほうは、この予測どおり、garasa nuduのような音調型で出現する。しかし予想外なのはAB型のほうで、語頭のL音調が、(32)の予想するように3モーラではなく、aVva nu duのように4モーラ分も続き、最後のモーラだけが高く実現する。つまり、AB型の語頭のL音調の長さは、「3モーラ」と限ったわけではなく、文節末まで拡張することがある、という点である。すなわち、AB型の出だしのL音調は、3モーラのまとまりを成すとは限らない、ということになる。

さらに、これらの3モーラ名詞にmeRdu, karadu, sjiRdu, gamiduなどの助詞連続が続いた場合も、前節で導き出した結論の例外が生じる。次の例は(15)の例を選んで示したものだが、この場合C型のほうは、文節末ではなく、名詞の末尾からフットの構築が始まっていると考えなければ、このような音調型を導き出すことはできない。

(33) 3モーラ名詞の2種の型

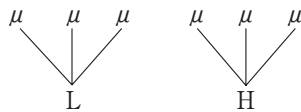
[AB型] manata meRdu uI (蛙もいる。)

[C型] funata meRdu uI (大蛙もいる。)

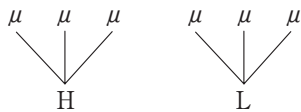
したがって、これらは、次に示すように、AB型も、C型も、両方とも文節ではなく、名詞の末尾部分から、フット構築が行われている、と考えなければならなくなってしまう。

(34) 3モーラ名詞にmeRduが後接した場合

[AB型] {ma na ta} {me R du} (油も…)



[C型] {fu na ta} {me R du} (団扇も…)



2モーラ名詞と3モーラ名詞に、いったいどうしてこのような違いが生じるのかについても、今のところ不明とせざるをえない。

このような例外は、最初の名詞が3モーラの場合だけではない。2モーラの名詞であっても、ある環境によっては、例外的なフットの構築がなされる場合がある。本調査で発見したのは、助詞連続NkeRdu (方向格助詞NkeR+焦点標識du)が、2モーラ名詞に後接した場合である。

すでに第2節で述べたように、2モーラ名詞は、多くの助詞連続が後続する場合に合流傾向を示す。(たとえば、道具格のsjiRduを付けて「鮫で作る、鍋で作る、桶で運ぶ」のような文を作成してもらった場合には、AB型、C型のどちらともがsaba sjiRdu (鮫で)、saba sjiRdu (草履で) というように、同じ音調型で出現する。)

ところが、NkeRdu (方向格助詞Nkee+焦点標識du)を付けて、「鮫に(銚を)投げる」「草履に(水を)かける」のような文を作成してもらうと、AB型とC型の明瞭な違いが出現する。

たとえば、次のような違いである。

(35) 助詞連続NkeRduが付いた場合の2つの音調型（ミニマルペア）

[AB型] saba N keR du … (鮫に…)

[C型] saba N keR du … (草履に…)

このことから、「鮫saba (AB型)」と「草履saba (C型)」は、アクセント型で対立する2モーラ語のミニマルペアであることが分かった。

そこで、このNkeRdu (向格助詞Nke+焦点標識du) を使用して、様々な名詞を「～に行く」、「～に入れる」、「～に漬ける」という文に入れて発音してもらおうと、2モーラ名詞にも、3モーラ名詞にも、次のように2つの型の対立が明瞭に出現することが明らかになった。¹⁰⁾

(36) 助詞連続NkeRduが付いた場合の2つの音調型

a. 2モーラ名詞にNkeRduが後接した場合

[AB型] jama N keR du … (山へ…)

Mta N keR du … (土へ…)

[C型] funi N keR du … (舟へ…)

tagu N keR du … (桶へ…)

bata N keR du … (腹へ…)

sudi N keR du … (袖へ…)

nabi N keR du … (鍋へ…)

sata N keR du … (砂糖へ…)

b. 3モーラ名詞にNkeRduが後接した場合

[AB型] taRra N keR du … (俵へ…)

akacI N keR du … (血へ…)

[C型] ukamaN keR du … (釜へ…)

oRda N kee du … (運搬網へ…)

maQfa N keR du … (枕へ…)

Nnagu N keR du … (砂へ…)

makaI N keR du … (椀へ…)

minaka N keR du … (庭へ…)

この場合、次のようなフット構築が成されていると考える必要がある。

(37) 3モーラ名詞にmeRduが後接した場合

[AB型] { ja ma N } { ke R du } (山へ…)

$\begin{array}{ccc} \mu & \mu & \mu \\ & \diagdown & \diagup \\ & L & \\ & \diagup & \diagdown \\ \mu & \mu & \mu \end{array}$

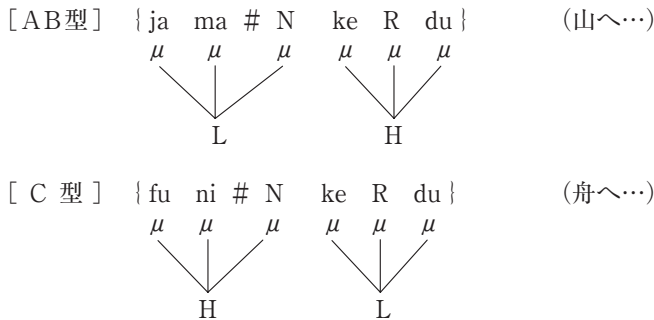
[C型] { fu ni N } { ke R du } (舟へ…)

$\begin{array}{ccc} \mu & \mu & \mu \\ & \diagdown & \diagup \\ & H & \\ & \diagup & \diagdown \\ \mu & \mu & \mu \end{array}$

ここで特に面白いのは、NkeRduという助詞連続が2モーラ名詞に続いた場合である。NkeRduは形態的には+NkeR+duと区別されるのだが、その最初のNはkeRとは切り離され、前の名詞と合体してひとつのフット形成の範囲となることができる。つまり、次に示すように、

形態素の境界をまたいで、フット形成が成されていることになる。

(38) (形態素の切れ目を#で示す。)



これが(27)の制約に抵触していないということは、NkeRduは、音韻的には、N+keR+duのように区切れていることを示唆している。

この場合、フット構築の範囲は、文節の句切れ目とは一致してしない。文節なら「funi N keR du」全体がひとまとまりとなり、C型はその文節末からフットが作られるので、*funi N keR duのような音調型となるはずだからである。しかし、そのような区切り方によってフット構築の範囲が決まっていないのは、それによりまったく同じ音調型がAB型とC型に生じてしまうのを、避けようとしているのかもしれない。

7. 複合語に観察される型の対立

さて、前節で考察したNkeRduであるが、(36 b)の例から分かるように、前に来る名詞が3モーラ語の場合は、taRra N keR du … (俵に…)のような音調で出現している。つまりAB型の最初のL音調は、かならずしも3モーラでなければならない、というわけではなく、4モーラ以上になっても許されることが、ここからも分かる。

それでは、前にくる名詞が4モーラ以上の場合はどうなるのだろうか。やはり、AB型は○○○NkeR du …のように、5モーラ分低く出現するのだろうか。4モーラの単純語を探すのが難しかったため、これは現時点では検証できていない。今後の課題である。

また、もしも上述のように3モーラがひとまとまりとなって単位を成しているとしたら、6モーラの名詞には、これまで見てきたような助詞連続が付いた場合、○○○○○○+meRdu (AB型) 対 ○○○○○○+meRdu (C型) というような型の違いが出現するのではないだろうか。

このような予想をたてたのだが、これを証明するには、モーラ数の長い名詞の例が多数必要となる。しかし、現実には5モーラや6モーラの単純語を、しかもAB型とC型のそれぞれについてバランスよく数をそろえて探すのは困難だった。

これを解決するために検討を試みたのが、複合語である。複合語は長いモーラ数の語が多いため、上述の仮説を検証することができるのかもしれない。すでに第1回目(1995年)の調査において、この方言では複合語に一種の「式保存」が成り立つことが分かっていた。つまりこの方言では、前部要素がAB型なら複合語全体もAB型になり、それがC型なら複合語全体もC型となるの

である。

つまり、複合語の後部要素を特定のものに固定し、その前部要素のほうを入れ替えてみることによって、AB型とC型のそれぞれについて、比較的長いモーラ数の語例を作成できる、ということになる。そのようにして、2回目の調査では、いくつかの複合語を作成して二人の話者に調査を行った。

このようにして作成した複合語を、「花畑に行く」「水甕に入れる」のように、上述のNkeRduを付けた文に入れて発音してもらった結果、2つの型には、次のような明確な音調型の違いが出現した。

(39) 「～畑」のアクセント型

[AB型]	pana <u>pari</u> <u>N̄</u> keRdu…	(花畑に…) ¹¹⁾
	mugI <u>pari</u> <u>N̄</u> keedu…	(麦畑に…)
	mami <u>pari</u> <u>N̄</u> keRdu…	(豆畑に…)
	suNna <u>pari</u> <u>N̄</u> keRdu…	(葱畑に…)
[C型]	ssjuC <u>pari</u> N keRdu…	(ソテツ畑に…)
	tamama <u>pari</u> N keRdu…	(キャベツ畑に…)
	cIguI <u>pari</u> N keRdu…	(ひょうたん畑に…)
	dakjoR <u>pari</u> N keRdu…	(らっきょう畑に…)
	nabjaRra <u>pari</u> N keRdu…	(へちま畑に…)

suNna pari N̄ keRdu (葱畑に…) と tamama pari N keRdu (キャベツ畑に…) から分かるように、予想通り、○○○○○○○+keRdu (AB型) 対○○○○○○○+keRdu (C型) という型の違いが出現した。

また、この複合語を使った検証から、AB型の出だしの低い音調は、pana pari N̄ keRdu (花畑に…) から分かるように(3モーラではなく)2モーラの場合もあり得る、ということが分かった。

さらに、次のデータのなかの beNtoR bako N̄ keRdu から分かるように、AB型の出だしのL音調は、「4モーラ」の長さにわたって連続することもあることも分かった。

(40) 「～箱」のアクセント

[AB型]	beNtoR <u>bako</u> <u>N̄</u> keRdu	(弁当箱に…)
	juRbiN <u>bako</u> <u>N̄</u> keRdu	(郵便箱に…)
[C型]	fusuI <u>bako</u> N keRdu	(薬箱に…)
	umisu <u>bako</u> N keRdu	(箸箱に…)

つまり、「AB型の出だしのL音調は、必ずしも3モーラでなくてよい」ということが判明した。一方、C型のほうのH音調は、常に3モーラ分の長さを保とうとする傾向が強いようである。

この高い音調の連続部分を3モーラ分に保つために、C型の場合、たとえばnabjaRra pari N keRdu（へちま畑に…）のように、語頭を低くすることがある。これに対してAB型のほうは、その低い部分を3モーラ分に保つために、たとえば*beNtoR bako N keRduのように語頭を高くする、というようなことはなかった。

つまり、「フットは3モーラを単位とする」という原則は、L音調より、H音調のほうに、より厳密に適用する、と考えられる。このようなH音調とL音調の実現する長さの違いについても、今後さらに調査してデータを増やした上で、その実態を明らかにしていく必要がある。

8. まとめ

以上、与那覇方言は、2つの音調型が明瞭な対立を見せる「2型アクセント体系」であることを論じてきた。特に名詞が3モーラ以上になった場合には、それにどのような助詞、あるいは助詞連続が続いても、2種類のアクセント型の対立が明瞭に出現する、ということも見てきた。平山ほか（1967）、崎村（2006）をはじめとする先行研究では、与那覇方言の2つの型の区別は不明瞭で、「1型アクセントのように誤って観察するおそれがある」、あるいは「1型音調ないし無型音調の方言にごく近づいたもの」、というように記述されてきた。しかし、もしこれらの先行研究が、3モーラ以上の長い語を用いて観察を開始していたなら、そのような結論には至らなかったのではないだろうか。

このことは、今後のアクセントの記述研究において、できるだけ長いモーラ数の語彙を調査することがいかに重要であるかを物語っている。また、名詞に一部の助詞を付けただけではなく、様々な助詞や助詞連続を付けて調査してみないと、アクセント体系の実態は最終的には明らかにならない場合がある、ということも示唆している。

この論文では、与那覇方言には3モーラがひとつの単位となったフット [$\mu \mu \mu$]が存在する、という発想に基づいて記述を試みた。この方言では、ある限られた条件のもとで2つの型の違いが合流してしまう性質があるのだが、その合流の根拠も、フット形成にかかわる制約(27)によって説明する案を提示した。

しかし、第6、7節の3モーラ以上の名詞の検討から分かったように、このフット形成がどのような仕組みに基づいているかについては、まだ不明の点が多く、今後の研究に残された課題が山積している。

しかしながら与那覇方言のアクセントは、以上述べてきたような、他の日本語諸方言には観察されないような興味深い特徴を持っている。この点において、典型的にみても重要であることが明らかになった。将来、従来の日本語諸方言アクセントの記述研究からは成し遂げられなかったような考察が、この方言のアクセントの観察・記述を通じて可能になるのではないだろうか。

注

- 1) これに加え五十嵐（2012）は、2モーラ語の単独形のピッチパターンに、祖語におけるA系列とB系列の違いが反映されていることを示唆している。実は、以下の注3、5、6、11からも分かるよ

うに、私もこの与那覇方言が、「2型アクセント体系」ではなく、実は「3型」アクセント体系なのではないか、と考えてきた。またその3つの型は、祖語のA、B、Cの3系列の違いを残したものである可能性がある、という五十嵐(2012)の見通しにも、賛成である。五十嵐(2012)のような与那覇方言の音響分析結果は貴重で、今後このような試みをさらに行っていけば、(多良間島、池間島に続いて)この方言にも3型アクセントが将来「発見」される可能性が十分ある。今後の調査・分析の発展が期待される。

2) 話者は、YM氏(女性、大正11年生まれ)、OH氏(女性、大正13年生まれ)、OK氏(男性、大正12年生まれ)の3人である。調査は、1995年3月と1999年12月の2回にわたって行われた。

3) この属格形で始まる句の発音において、一部の名詞が、この「kazi nu naI (風の音)」などの音調型とは異なり、jama nu naka (山の中)、pana nu iru (花の色)のように、3拍目から上昇する音調型で出現した。これは、かつてのA系列とB系列の区別と関連しているものかもしれない。ちなみに、属格の形を基に「～の音もする」という文を造って、それを発音してもらおうと、次のような音調型の違いが観察された。

[A系列と思われる名詞から始まる場合]

mizu nu naI meRdu sI (水の音もする)

kazi nu naI meRdu sI (風の音もする)

[B系列と思われる名詞から始まる場合]

ami nu naI meRdu sI (雨の音もする)

この方言のデータからは、どの語がA系列で、どの語がB系列かの判断は(少なくとも現時点では)正確に判定できないが、(はっきりと3型アクセント体系であることが証明されている)多良間島のデータ(松森2010など)を参照すれば、かつてのA系列とB系列の名詞の音調型の区別の痕跡が、属格形に残されているということが、将来、証明できるかもしれない。しかし現時点では、データが少ないため、はっきりと結論づけることはできない。さらに詳細な調査が必要である。

4) meRduは、AB型の名詞に後続するとjama meRdu…(山も)のようにmeRduの2モーラ目直後に下がり目が出現することもあった。3モーラ名詞から始まる場合も同様で、buduI meRdu…(踊りも…)、aVva meRdu…(油も…)のような音調型も観察された。

5) 調査した中で、ひとりの話者の発音では、meRduが付くと、jama meRdu…(山も…)、mugI meRdu…(麦も…)、fumu meRdu…(雲も)、pana meRdu…(花も)のように、通常のAB型の音調(○○meRdu)とは異なる音調型が常に観察された。これも宮古祖語に想定されるA系列とB系列の型の区別と関係がある可能性がある。もし今後、A系列とB系列の区別が、ある特定の助詞連続部分の「上昇位置の違い」によって区別されていることが証明できるならば、与那覇方言は、宮古祖語の3つの型の区別を今も保っている方言だということが示せるに違いない。この点は今後、音響分析なども駆使しながら、詳細に検討すべき課題である。

6) ただし、AB型の場合には○○gamidu…の他に、○○gamidu…という型も観察されている。たとえばjama(山)の場合は、jamagamidu…(山まで…)のように、助詞部分の全体が高くなるのに対して、nama(今)の場合は、namagamidu…(今まで)のように最後のモーラのみが高くなる。これは、3モーラ語の「aca(明日)、junaka(夜中)」対「kutusI(今年)、pIsuma(昼)」にも観察された。前者はacagamidu…(明日まで…)、junakagamidu…(夜中まで…)となるのに対して、後者はkutusI gamidu…(今年まで…)、pIsuma gamidu…(昼まで…)と最後のモーラのみが高く

なる傾向がみられた。つまり、AB型には、2つのタイプの型が出現するように思われる。今後さらに詳細に調査すれば、次のような3種類の型の対立が発見され、この方言が3型アクセント体系であることが証明できる可能性がある。

- ・ A型 $\text{kutusI gamid\u0304u}\cdots$ (今年まで…)
- ・ B型 $\text{junaka gamid\u0304u}\cdots$ (junaka gami du とも) (夜中まで…)
- ・ C型 $\text{jaRni gamid\u0304u}\cdots$ (来年まで…)

この場合も、A型とB型の区別が、宮古祖語のA系列とB系列の対立を残したものである可能性をも視野に入れながら、今後さらに調査・検討すべきである。

- 7) sjiRduは原則的に3モーラの助詞連続だが、sjiduのように2モーラで出現することもあった。(ひとりの話者は、すべてを2モーラで発音していたが、他の二人は原則的に3モーラだった。) 3モーラで発音する2人の話者が、これをsjiduのように2モーラにするには音韻条件があった。それは、uRki sjidu (桶で)、baRki sjidu (籠)、maRsu sjidu (塩で)、poRki sjidu (箒で)、manzuR sjidu (パイヤで)、fusuR sjidu (葉で)のように、すでに名詞内部に長音Rが含まれる場合である。
- 8) つまりこの与那覇方言は、「どこに」下がり目や上がり目が出現するかが弁別的のではなく、それぞれの語が、LH型かHL型の「どちらのタイプの型を持つか」ということがレキシコン内部で指定されている、ということになる。そうすると、与那覇方言は一種の「声調」言語であるということもできる。
- 9) 実は、AB型のほうも、C型と同じく文節末からフットの構築が成される、と考えたほうが、後述する(36b)や(40)の例を説明するのに適しているのだが、ここでは一応仮にこう考えておくこととする。

- 10) 1モーラ名詞の型の区別についても、様々な助詞あるいは助詞連続を後接させて2つの型の対立が見られないかを検討したが、多くの場合、次のように、1種類の型しか観察できなかった。

・ meRduを付けた場合

$\text{paR meRdu}\cdots$ (葉も…) $\text{kiR meRdu}\cdots$ (木も…)

・ karaduを付けた場合

$\text{kaR karadu}\cdots$ (川から…) $\text{jaR karadu}\cdots$ (家から…)

$\text{juR karadu}\cdots$ (湯から…) $\text{suR karadu}\cdots$ (酢から…)

$\text{zuR karadu}\cdots$ (土から…)

しかし、NkeRduを付加して「湯につける」「酢につける」のような文を作ってもらった場合に限って、次のような2つの型の対立が出現した。

[a] $\text{juR N keR du}\cdots$ (湯に…) $\text{kaR N keR du}\cdots$ (井戸に…)

[b] $\text{suR N keR du}\cdots$ (酢に…)

これが、本来のA系列とB系列の違いの区別を保ったものかについては、さらに詳細に検討して見ないとわからない。しかし、(NkeRduをはじめとした一部の助詞連続を使って調査することによって) 1モーラ名詞にも2つの型の区別が、今後、発見できる可能性が開けてきたと言える。

- 11) (前部要素がAB型なので) 本来ならLHLと出現するはずの一部の複合語に、 $\text{○○○○○○} + \text{keRdu}$ のようなHLHの交替リズムが観察された。その例は、 $\text{piI pari N keRdu}\cdots$ (にんにく畑に…)、 $\text{guma pari N keedu}\cdots$ (胡麻畑に…)、 $\text{buRgI pari N keRdu}\cdots$ (砂糖黍畑に…)、 mIRna pari N

$\overline{\text{keRdu}}\dots$ (葦畑に \dots)」である。

ちなみに「 $\overline{\text{piL}}$ (にんにく)」「 $\overline{\text{guma}}$ (胡麻)」は、多良間島ではA系列の語である。「砂糖黍」のことは、残念ながら多良間島では $\overline{\text{sIQzja}}$ (C系列)を使用し、 $\overline{\text{buRgi}}$ は使用しないらしいので、宮古祖語でこれがA系列だったかどうかは不明である。「 $\overline{\text{mIRna}}$ (葦)」の同源語は多良間島では調査していないため、その系列は今のところ分からないが、A系列の可能性が高い。

複合語に焦点を当ててさらに調査をしてみると、単純語では消滅した(あるいは消滅しかけている:注1、3、5、6参照)A系列とB系列の本来の型の区別が「複合語に限って残されている」、ということが言えるかもしれない。この点に関しても、今後の調査が期待される。

また、第2要素が3モーラの「 \sim 枕」で終わるアクセント型についても、同様なことが言えそうである。(ただし前部要素がA、Bのどちらの系列に所属するかは、この方言の単純語のアクセント型からは判断できないため、松森(2000、2009、2011、2012)その他の北琉球のデータに基づいて判断した。)

[前部要素がA系列と思われる複合語]

$\overline{\text{mizI maFfa}}$ (水枕) / $\overline{\text{mizI maFfa N keRdu}}\dots$ (水枕に \dots)

[前部要素がB系列と思われる複合語]

$\overline{\text{bata maFfa}}$ (綿枕) / $\overline{\text{bata maFfa N keRdu}}\dots$ (綿枕に \dots)

前部要素がA系列の「水」から成る複合語「水枕」は、HLHパターンで出現し、それがB系列の「綿」から成る複合語「綿枕」は、LHLパターンで出現した。複合語を使ってさらに検討を行えば、この方言の祖語のアクセント体系では「A系列がHLH(ないしはLLH)パターン、B系列がLHLパターン、C系列がHLパターン」であった、ということが、推定できるのではないだろうか。今後、詳しく検討してみる必要がある。

参考文献

- 五十嵐陽介 2012.「南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系:初期報告」『国立国語研究所共同研究報告12-02 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』国立国語研究所:53-68.
- 五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之 2012.「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』第16巻第1号:134-148. 日本音声学会
- 崎村弘文 2006.『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』 明治書院
- Shimoji, Michinori 2009. Foot and Rhythmic Structure in Irabu Ryukyuan. Gengo Kenkyu. 135: 85-122.
- 平山輝男(編著)1983.『琉球宮古語島方言基礎語彙の総合的研究』 桜楓社.
- 平山輝男、大島一郎、中本正智 1967.『琉球先島方言の総合的研究』 桜楓社.
- 松森晶子. 2000.「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発-沖永良部島の調査から-」『音声研究』第4巻第1号:61-71. 日本音声学会
- 松森晶子 2009.「沖繩本島金武方言の体言のアクセント型とその系列-『琉球調査用系列別語彙』の開発に向けて-」『日本女子大学紀要 文学部』第58号:97-122. 日本女子大学文学部
- 松森晶子 2010.「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 監修『日本語研究の12章』 明治書院:490-503.
- 松森晶子 2011.「喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙-赤連と小野津の比較から-」『日本女子大学紀要 文学部』60号:87-106. 日本女子大学文学部
- 松森晶子 2012.「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』第16巻第1号:30-40. 日本音声学会
- ペラール、トマ、林由華 2012.「宮古諸方言の音韻-体系と比較」『国立国語研究所共同研究報告12-02 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』国立国語研究所:13-51.